

私たちは、命のつながりに思いを馳せる暮らしを提案し、心豊かな生き方のお手伝いをします。

創業 明治44年

命のつながりを想う



長門屋

お城の店が目印です。

発行 有限会社 長門屋
編集：未来の種まき委員会
〒990-0042
山形市七日町1-4-12
TEL 023-622-2204
FAX 023-622-2203
http://oshironomise.com
2018年 第26号

あどつあま

“あどつあま”とは…

仏様をさす方言。米沢の方では住職様、僧侶をさすそうです。
宗教の知識を通してお役にたてれば嬉しいです。



左脇間

右脇間

お寺の中（本堂）様子

長門屋「寺院荘厳部」日記 山辺町 了廣寺様

山辺町にある了廣寺様は、以前からお店とお取引いただいているお寺様です。主に仏具や修復のお仕事をさせていただいています。門徒さんのこととで相談があるといつもお電話をいただきます。いつも感じるのは住職の人柄の良さです。住職は社会人としてお勤めされた経験もありで、一般的な感覚をお持ちなので、きつと門徒さんもしやすいのだらうなと思います。

お寺の将来を考え、計画的に整備を進めていったり、数年前には本堂の内陣修復の作業もさせていただきました。今年も、永代供養塔を完成させるなど時代の変化に合わせて対策をとってまいります。その一環としてこの度は、本堂内の両脇間の金壁紙を貼り替えさせていただきました。経年変化が目立つようになり、十二月には毎年恒例の大きな法要を控えているため、それまでに修復したいとのご要望でした。



古くなった本堂の両脇間の金色の壁紙を貼り替え、美しさを取り戻した様子

本堂のある日の
黑板には
こんな言葉が
ありました。



鬼目山 了廣寺（真宗大谷派）
山辺町山辺 969
023-664-6119

法事とは
亡き人のご縁をいただいて
私にご縁に会う場を
持たせてもらう場なのです
私たちは
してやったことだけを覚えていて
していただいたことを忘れていきます
法事は
自分自身の生き方を
省みることはない私たちが
このままで良いのか
仏法に出遇って生きている喜びを
見出せと
亡き人に導いてもらうことに
意味があるのです
そういうことが
法事の一番大事なことです

長門屋の敷地奥「ひなた蔵」と「塗蔵」が映画会場になりました。



(上の写真3点 撮影:根岸功 提供:東北芸術工科大学)



荒井良二さんのイラスト入りの長門屋オリジナル 24 時間ろうそく (燭台・マッチ付)

この九月は、東北芸術工科大学の二年に一回のアートの祭典「山形ビエンナーレ」が、大学内と山形市の中心市街地の二つのエリアで、毎週末を使って繰り広げられました。

ほかの人とつながることで、広がるご縁を大切にしたいとの思いから、貸し出しを承諾した長門屋の二つの蔵もドキュメンタリー映画の会場となりました。映像作家・写真家の茂木綾子監督による、修験道の聖地・出羽三山を訪ね、老山伏の薫陶を受けながら、山と人の関係を撮り下ろした「山の人」「火の子」。そしてトチノキの原生林のほとりで蜜蝋キヤンドルを作り続ける職人を撮った「森の人」。その三編が繰り返し上映され、会期中には三千人近い方々が、来場して下さいました。映像の老山伏が鳴らす法螺貝(ほらがい)の音は、かつて長門屋の二代店主が朝のお参りの時に法螺貝を鳴らしていた姿や、澄み切った空気を思い起させ何とも不思議な感覚になりました。

来場者の中には、「昔、長門屋でお仏壇を買った」とか、「珠数を直してもらった」と申し出て下さる方もいらして、昔のご縁に再会することも出来ました。

映画は、山形に脈々と受け継がれる祈りの文化や、ろうそくの手仕事という人間活動がテーマになっており、自社の「命のつながりを想う」や「地域の魅力に貢献する」という理念に通じるもので、山形の街中の魅力を育てることに関わることでできたことは、大変うれしいことでした。

(笹林)

京都 香老舗松栄堂さん見学の巻



天上から吊下がった三つの箱の中に頭を入れ込むことで、香りの違いを体験できる「香りBOX」。小瀧が体験中です



お香の原材料である「白檀」「沈香」など様々な香りを聞くことができる「香りの柱」



京都の朝、東本願寺前の国島と小瀧

十月に、スタッフ3人で京都で開かれた業界の研修会に参加してきました。その研修後、京都の老舗のお線香メーカーである松栄堂さんにお寄りして、この秋オープンしたばかりの香りの体験型スペース「薫習館(くんじゅうかん)」と、お線香の香房を見学させていただきました。京和傘の大きな照明に迎えられた「薫習館」の一階には、お線香の原料に使われる香りを学んだり感じたりすることが出来る、工夫の凝らされた様々な体験コーナーがありました。「お香の香りを世界に発信して広げよう」とする松栄堂さんの新たな試みは、どれも社員さんたちのアイデアから生まれたものだとか。何より若い社員さんたちが生き生きと自慢げに案内してくれるのが印象的でした。



大陸から伝わり、日本で発達したという繊細な線香文化

香房では、お線香が出来るまでを見学しました。お線香の基となる材料と水とを機械に入れ練り合わせる様子はまるでうどんこね機のように。にゅにゅと巨大なパスタマシンのような機械から絞り出された、やわらかなお線香は、木の板で受けて、竹製の道具でカットし長さをそろえてから乾燥させ、箱に入れて完成です。

(小瀧)